

価値理論の展開

山 本 二三丸

まえがき

一般に「価値論」といえば、マルクス『資本論』第一巻第一章第一節に述べられている「価値の実体」と「価値の大きさ」についての議論がその内容を成すものだと考えられている。わたくしもむかしはそのような見解をうのみにしていたが、しかし、かなり以前から、そのような見解はすこぶる問題あるものであって、厳密にいうならば経済理論についての或る種の曲解を示したものではないか、と考えるようになった。この拙論の主題ともかわりがあるので、その理由を簡単に述べてみよう。

経済理論は、「原理論」などという前代未聞の括弧つきの「論」などとは根本的にちがって、もっとも基本的な抽象的な法則からもっとも複雑で具体的な法則までを論理的に正しく整序して把握し展開しているひとつの理論体系、いいかえれば科学をなすものである。その理論体系を構成している要素は、いわばそれ自体としては独立した理論と

はなりえない。それらはすべて全体を構成する特定の部分としての規定をあたえられており、そうした規定をもつかぎりで経済理論のうちに一定の位置を占めるものとなっているのである。個々の理論部分をとりあつかうときには、このことをしかと銘記していることが肝要である。ところが、「原理論」などという前代未聞の超論理的な「論」を発明した和製デューリング先生の世紀的出現いらい、この国では、マルクス『資本論』のなかに列挙されている各章や各節の表題をそのままとってきて、これに「論」という文字をくっつけてたちまち無数の「論」をこしらえあげるといふ斬新な手がひろく「大学教授」のあいだでもはやされるようになったものである。この手にかかると『資本論』のなかに並べられている章や節の数と同じほどの「論」がたちまち出来あがる。ひどいになると、例の和製デューリング先生のように、『資本論』第一巻第七篇「資本の蓄積過程」のうちの冒頭の章、つまり第二十一章「単純再生産」の表題だけを読んで、その内容は一字も読まずに——あるいは一読したかもしれないが、超論理的・超国語的読み方のおかげで——「この第二十一章でマルクスは単純再生産論を論じている。しかし再生産論は本来第二巻第三篇で論じられているのであって、このように飛びはなれて第一巻第二十一章で再生産論を論ずるのは、誤りである。マルクスは論理的にみてすらない」などといった批判文をものするのにけんめいである。例によって和製デューリング先生のお弟子たちも、この手法を忠実に真似て、『資本論』第二巻のうちの表題をそのまま無断借用して、その第一篇は「資本の循環論」、第二篇は「資本の回転論」を論じていると書き立て、さて、「マルクスは資本の循環論において論理的誤りを犯している」などといった批判文字を並べることが忘れない。これによって、この方々は、「論を論じるほどのえらい大学教授」であり、「マルクスの欠陥を指摘するほどの超マルクス的大先生」であるといった「名声」をとてもなくものにすることになるのである。

もちろん、わたくしは『資本論』のうちの特定の部分が問題となつてるとき、しかもその部分を理論体系全体から一応ひきはなして考察することができ、またそのようにすることが当面その部分の基本的意義を正確に把握するために必要かつ適切であると考えられる場合には、その個所の表題に「論」をつけて、問題となつてゐる理論部分を表示することに反対するものではない。たとえば『資本論』第一巻第一章第三節「価値形態または交換価値」でマルクスが論じてゐる内容をとりあげて問題にすると、その内容を言いあらわすためにその表題をそのまま採らずに、これを「価値形態論」というように書きあらわすこともできる。しかし、この場合でも、注意しなければならないのは、その「価値形態論」とは、マルクス『資本論』第一巻第一章第三節の内容を成しているもの、つまりマルクスの「価値形態論」であつて、和製デュリング先生らがマルクスを超克してはじめて創作したような超論理的な「価値形態論」ではけつしてないことである。だから、われわれが「価値形態論」を問題として議論するときは、マルクスの理論体系を正しく把握したうえで、とくに『資本論』第一巻第一章および第二章の内容をそのはじめから正確に理解していることが、不可欠の要件となる。また、それでなければ、マルクスの「価値形態論」をあれこれ論ずる資格も能力も、当然のことながら、ないと言つてよい。

ところで、たとえば第一章第三節「価値形態または交換価値」のばあいにはそれが特定の限られた理論部分であるということによつて、これを「価値形態論」というように表現して第三節の中でマルクスが展開している議論をとりあげ考察することも許される。だが、『資本論』第一巻第一章第一節の内容だけをとりあげて、これがマルクスの「価値論」であると言ふことができるであらうか？ いいかえれば、マルクスの「価値論」という「論」は、その第一巻第一章第一節の内容に限られるものだと言ふことが、はたして許されるであらうか？ いうまでもなく、それは

まったく誤りであり、マルクスの経済理論を歪めるものでしかない。マルクスの価値理論は、『資本論』第一巻第一章第一節にはじまって、全三巻をつらぬくもっとも基本的な理論となっているものである。いいかえれば、マルクスの価値理論は、第三巻まで一貫して妥当し、しかも第三巻にいたってもっとも複雑・豊富な規定をもつことによって具体的な展開をとげているのであり、そのためにこそ、マルクスはその第一巻第一章でもっとも基本的・抽象的な価値理論を説明しているのである。それゆえ、「価値論」という名の「論」をもつてきて、それは『資本論』第一巻第一章第一節の所論を指すものだと呼ぶのは、甚しい錯誤を示すものであり、またマルクスの価値理論を完全に歪め、矮小化するものでしかない。通常の論理を超越した世紀的な超論理的思考方法と作文方法を身につけたかの和製デューリング先生が『価値論』と銘うった著書を著わしながら、マルクス『資本論』第一巻第一章第一節からの抜き書きと他人の追隨を許さない独自の作文方法との混然、一体という前人未踏の境地を拓くことによってたちまち経済学界にめざましい地位を確立したのは、まことに理に叶ったことであつたといつてよい。

そこでわたくしは、この小論において、マルクスの価値理論を、そのもっとも基本的な抽象的なものからそのもっとも具体的な複雑なものにいたるまで、その豊富な全体像においてとらえることをこころみることにしたいと考える。表現を変えれば、マルクス『資本論』全三巻において、かれの価値理論が第一巻第一章第一節にはじまって第三巻末尾にいたるまでどのように展開されているかということを追跡けることが、この小論の課題である、といつてよい。わたくしは、はじめこの小論の表題を「価値理論の体系的論究」としたものであるが、体系を成しているのはまさに経済理論そのものであつて、価値理論が体系を成しているものではないので、誤解を避ける意味もあつて、ひかえめに「価値理論の展開」というように改めたものである。

ところで、右のような主題のもとにこの小論を発表するについては、つぎのような歴史的事情が介在しているという事について、簡単な釈明をしておくことが適當であると考ええる。いまから約十八年前、わたくしは著書『価値論研究』を公刊したが、その内容は、それよりさらに九年前、つまり一九五三年から一九五七年にかけて本誌に連載された論文『市場価値と市場価格』をまとめたものであった。その著書を出した当時のわたくしの考え方が、現在の考え方と基本的にはまったく同一であることは、一九六二年三月という日付をもって記されている右の著書の「まえがき」のうちに述べられているつぎの言葉によっても明らかである。

「経済理論は、緊密な関連のもとにひとつの包括的体系をなしているがゆえにこそ、一個の科学的理論なのである。価値論の意義とその内容をたゞしく説明することとは、とりもなおさず、価値論が経済理論全体系の中でどのような「位置」を占めているかということを説明すること、そのことである。『資本論』第一巻第一章における価値規定の内容をたゞしくとらえることは、それが『資本論』全体のうちでどのような「位置」を占めているか、それは『資本論』全三巻をどのようにつらぬいているかということを、その全体的な広がりに関連のもとにおいて把握することにはかならない。その「位置づけ」の問題をつねに念頭におき、これとの関連においてその豊富な全内容をくみつくすようにつとめるのでなければ、第一章におけるひとつの簡単な命題の意味すら、これを正しく読みとめることはできない」（拙著『価値論研究』、一—三ページ）。

基本的な考え方は変わらないとはいえ、その後研究を重ねているうちに、わたくしは、著書『価値論研究』のうちのとくに第四章「第三巻第十章における「不明瞭な箇所」の検討」のなかの説明に見逃すことのできない欠陥がふくまれていることに気づいた。一言でいえば、いわゆる「不明瞭な箇所」なるものについて、マルクスの叙述の深い意

味を十分に読みとることができず、そのために硬直した、一面的な解釈におちいらざるをえなかった、ということである。こうした不十分な理解については、あとでこの小論の本文で説明がなされるはずであるが、要するに、価値という言葉についての一面的な拘子定規的な解釈というものが基礎にあったということである。いずれにせよ、たとえ部分的であっても、不十分な解釈ないしは欠陥をふくんだ著書を、それと知りつつ公刊することは、わたくしの学者的良心が許さなかったのであって、わたくしはまもなくこの著作の版を絶つことにした。それは、いまから十二、三年ほど前のことである。その後わたくしは、『資本論』第三卷第十章のいわゆる「市場価値論」について自分なりに納得のいく考え方をつくりあげ、いわゆる「不明瞭な箇所」についても、またしばしば問題とされる第三卷第三十九章「差額地代Ⅰ」のうちのいわゆる「虚偽の社会的価値」の問題についても、首尾一貫した——とわたくしの考える——理解を得ることができるようになったが、それは、前者『価値論研究』の中に示されたものとは、ある意味ではかなり隔たりのあるものであった。前者を絶版にしたあとも、今日までひきつづいて前者の中の所論をとりあげて論駁ないしは批判する論者は数多く公刊されたのであるが、わたくしはこれらに応えることをいっさいしなかった。すでに自分でも欠陥あるものとして克服し「揚棄」してしまつたと考える古い見解をとりあげて、同じように限られた視野からあれこれ論じている議論を見ると、わたくしは、しばしば、——まことに僭越な表現をとって申訳ないが——マルクスがその労作『経済学批判』の「序言」のなかで「鼠どもがかじって批判するままにまかせた」と述べているくだりを想起したものである。だが、それらの「専門家」はさておき、善意の一般読者にたいしては、やはり、わたくしは、前者の欠陥ないしは誤りをすっかり克服し「揚棄」したと自分で考えるところの、最終的な見解をなるべくはやく、はっきりと呈示すべき責務を負っているという反省をもっていた。その発表はできるだけ早いこした

ことはないのであるが、さきの過ちにこりてなるべく十分に練りあげてから公表したいという気持が一方にあり、他方、つぎつぎと起ってくる当面緊急の課題との取り組みにおわれるという事情もあって、心ならずも今日まで延引するのやむなきにたちいたったものである。今日ようやくその機会をえたので、旧著にかんするわたくしの積年の債務もこのさいあわせて完済することにしたというのが、この小論を発表する動機のひとつとなっているのである。あわせて、この小論の執筆をわたくしにつよく迫ったのは、マルクスの価値理論についてのさまざまな曲解や歪曲、ないしは改ざんの旧態依然たる猖獗であり、とりわけかの和製デューリング先生のエビゴーンたちによるマルクス経済理論のとどまることを知らぬ超論理的改作の盛行という事実である。

この小論は、このようにいろいろな意味において重要な課題を負っているものであるが、こうしたマルクス価値理論の体系的論究をしっかりとらえた基礎の上に築きあげるために、わたくしは、まず、科学的経済理論における価値という概念の内容を正確にとらえることから論究をはじめることにしたといかんがえる。

一

一般に経済学で用いられる基本的な用語がすべて日常生活においても使われているものであること、しかも、日常用語としての意味と経済学の基本概念としての意味とのあいだには大きな開きがあることは、経済理論を科学として学ぼうという心構えをもっているほどの者ならば、誰ひとり知らぬものはない。それだからこそ、われわれが経済学の基本的用語を主題として論ずるときには、必ずその用語の意味内容を厳密に確定してこれを明示しておかなければならないのであって、これは当然の手続きとして必要不可欠である。ところが、この当然の手続きをとろうとせず、主題となっている基本的用語の意味をまったく説明することなく、いきなりマルクスの所論をそのままかかげた

り、これについての勝手な解釈を並べたてるといふやり方をとっている「専門家」や「大学教授」はきわめて多く、必要な説明をおこなうものはほとんど見当たらないといつてよい。ことにマルクスの経済理論に難癖をつけることに熱心な「専門家」や「教授」はこうした説明をまったく省いているが、これは、マルクスの理論の内容を歪曲し改ざんするには、そのほうが合目的だからである。生半可で下手な説明を並べては、己れの正体がたちまちばれる恐れがあるのである。そこで、わたくしはこれらの意識的または無意識的サボタージュの自然的流行という事態にかんがみて、科学上の用語の意味内容を厳密・正確に把握し明示することがいかに緊要であるかということを懇切かつ的確に教示しているエンゲルスの文章をつぎにかかげて、読者の注意を喚起することにしたといふことを考える。これは、現行『資本論』第一巻のはじめに収められている「英語版への序文」のうちの一節である。『資本論』の英語版をつくりあげる経緯について、そしてとくに英語訳における表現のむづかしさについて、必要な説明をしたあと、エンゲルスはつぎのように述べている。

「それでもなお、われわれが読者のために取り除くことができなかった困難が一つある。というのは、いくつかの用語をそれらの日常生活での意味と違うだけではなく普通の経済学上の意味とも違った意味で使用しているということである。しかし、これは避けられないことであつた。一つの科学の新しい把握はすべて、その科学の術語の革命をふくんでいる。このことをもっともよく示しているのは、化学である。化学では術語全体が約二十年ごとに根本的に変えられている。また、化学では、つぎつぎとさまざまな名称を変えられなかった有機化合物は、おそらく一つも見いだせないであろう。経済学は、総じて、商業界や産業界の用語をそっくりそのまま取ってきて、それを操作することです満足してきたのであつて、そうすることによって、経済学は、そのような用語で表現される観念の狭い範囲内に自

分自身を閉じこめたということには、まったく気づかなかったのである。だから、古典派経済学でさえ、利潤も地代も生産物のうち労働者がその雇主に提供しなければならぬ不払部分の細分であり断片であるにすぎない（雇主はこの不払部分の最後の排他的な占有者ではないがその最初の取得者である）ということには十分に気づいていながら、しかもけつして、利潤や地代の通例の観念を越えて進んだことがなく、生産物のこの不払部分（マルクスが剰余生産物と呼ぶ部分）を一つの全体としてのその総体性において研究したことがなく、したがってまた、その源泉と性質とについても、その価値のその後の分配を規制する諸法則についても、明瞭な理解に到達したことがなかったのである。同様に、農業または手工業でないかぎりすべての産業が区別なしにマニファクチュアという言葉で一括され、そのために、経済史上の二つの大きな本質的に違う時代、すなわち手工労働の分割を基礎とする本来のマニファクチュアの時代と、機械を基礎とする近代的工業の時代との区別が消し去られている。だが、近代的資本主義的生産を人類の経済史上のたんなる一通過段階と解する理論が、この生産形態を不滅な最終的なものとみなす著述家たちの使いたれた用語とは違った用語をつかわなければならないということは、いうまでもなく明らかなことである」（ディーツ版、マルクス・エンゲルス全集、第三巻、三七—三八ページ）。

エンゲルスは、「いくつかの用語」と言っているが、右に述べられていることは、経済学の基本的範疇のほとんどすべてに——わずかに剰余価値、不変資本、可変資本など、マルクスによってはじめて確定されたごく少数のものをのぞいて——あてはまるのである。つまり、大部分の経済学用語については、まず日常生活において、とくに商業界および産業界においてふつうにつかわれているものとしての意味をとらえ、つぎに、「普通の経済学」、いいかえれば「最良の古典派経済学」をふくめてすべてのブルジョア経済学においてつかわれるものとしての意味をとらえたうえ

で、さらにマルクスによつてはじめて確立されえた科学としての経済学においてそれらの用語がまったくちがった、新たな科学的規定をうけたものとしてもつ意味を明確にすることが、絶対に必要なものであつて、このような三つの異なった意味内容をはっきりと確認することなしには、それらの用語を配した経済学的命題の意味を正確に把握することはおろか、総じてこれを問題として論ずること自体がおよそ無意味なものとなつてしまふのである。エンゲルスによつて明確に教示された右の注意事項は、きわめて重大なものであつて、当の論者が科学として経済学に真剣に取り組んでいるか否かは、右の注意事項を確実に履行しているか否かによつて明らかに区別されるといつても、けつして過言ではない。今日わが国で和製デューリング先生のエピゴーネンたちが簇生していることのひとつの根拠は、右の三つの意味を明確に把握することがきわめて困難であるという事情を利用して、ブルジョアの觀念と超國語的語法をもつてつくられた超論理的各種論文が大量に売り出されているということによるものといつてよい。

右のように三種の意味を識別することは、より具体的な範疇については比較的容易であるが、より抽象的な、より簡単な範疇についてはきわめてむづかしく、とりわけ商品および価値については、もつとも識別困難であり、したがつて、ほとんどの「専門家」はこの識別をあらかじめ明確に呈示するという手数をかけようとなしない。和製デューリング先生のエピゴーネンたちとちがつて真に科学的な論究を志す研究者のあいだにおいてもしばしばさまざまな誤解や偏見がその議論を支配するという現象がみられるのは、右のような事情によるものとみられる場合もけつしてすくなくないのである。

そこで、われわれとしては、まず、価値とはどういうものであるかということについて、右に述べたような三つの考え方を明らかにしておかなければならないのであるが、そのためには、それにさきだつて、まず商品についての三

種の考え方をはっきりさせておく必要がある。というのは、経済学で取り扱う価値はつねに商品の価値でなければならぬからであり、また、経済学の理論体系の「端緒」(Anfang)をなすものはまさしく商品であつて価値ではないからである。

では、商品なるものは、日常用語としてどのような意味をもつものとされるか？ 人間にとってある一定の効用をもつていて、いくらかの貨幣とひきかえに売り渡されるものは、すべて商品である。つまり、なんらかの効用があり譲渡されうるものは、ひとつ残らず商品であるか、または商品となりうるものである。この社会で暮していくにはこうした解釈で十分であり、またそれが日常生活にとられた俗物にもっともふさわしい観念である。こうした俗物にふさわしい解釈とちがつて、古典派経済学は、商品について一定の歴史的限定を加え、人類社会の歴史的発展の一定の段階、つまり文明社会において社会的分業のもとで生産された物を商品と考える。そして、この文明社会で使用価値と交換価値とをもつものはすべて商品である。これによつても明らかなように、古典学派のよつて立つところの歴史的・社会的観点なるものは、実はすべての人間社会に妥当する非歴史的観点にはかならない。というのは、およそ社会的分業をもたない人間社会はありえないからである。厳密な歴史的・社会的観点に立っているのは、ひとりマルクス経済学だけである。この科学的見地からみると、商品は、特定の生産関係つまり生産手段の私的所有という社会的生産関係のもとでの生産物であつて、他人の生産物と私的に交換される物にかざられる。いいかえれば、私的労働の生産物でありながら、私的交換を通じて他人のための物、つまり社会的生産物に成らなければならないものだけが、まさしく商品なのである。

右のような商品にかんする三種の考え方を比較することによつて、われわれは、マルクスによつて確立された経済

理論だけがひとり科学の名に値するものであること、それだけが歴史科学としての本来の見地を堅持するものであることを、はつきりと与えることができる。⁽¹⁾

(1) かの和製デューリング先生は、元祖デューリングに劣らず、不朽の名文句を数多く遺したものであるが、なかでもとくに「商品・貨幣・資本は、いかなる生産関係の下に生産されたかに関係のない流通形態である」という文章は、形態規定についての完全無欠の超論理的解釈と他人の追隨を許さない独自の思考を體現している範例として、まさしく後世に伝えられる十分の価値をもっている。この文章が、歴史科学としての経済学ではなくて超歴史的経済学をうちたてようという、まさに超デューリング的性向を示したものであることについては、いずれ後段で吟味しよう。

そこで、つぎに本来の主題である価値 (value, la valeur, der Wert) について、日常用語としての意味、古典派経済学における意味および科学的経済学における意味を考えてみることにしよう。

日常用語としての価値は、文字どおり、ねうちであり、役立ちであるが、この場合注意しなければならないのは、この意味においてすでに価値という言葉は、ひとつの主体と、この主体に結びついたある関係を内蔵しているものであり、したがってその意味においてりっぱにひとつの概念となつているものだ、ということである。そこにはねうちを認めるところの人間主体がいなければならず、またそのねうちは人間主体にとってのねうちであり、役立ちでなければならぬ。こうして日常用語としては、人間にとつてなんらかのねうちをもち、役立ちをもつものは、すべて価値をもつことになる。それは物でなくてもよい。たとえば、「マルクスの名前は利用する価値がある」といった類いである。

古典派経済学における価値は、右の日常用語としての意味を基本としてそのうえに経済学的な限定を加えたものとなる。価値は商品の価値であり、商品が人間主体にたいしてもつねうちであり役立ちである。それは、人間主体にと

っての商品のねうち、役立ちであり、あくまでも主体は人間であり、商品はこれに従属し奉仕するものとしてのみある。したがって、当然のことながら、人間主体にとっての商品の価値は、その使用におけるねうち「役立ち、つまり使用価値 (use-value, la valeur d'usage, der Gebrauchswert)」と、交換におけるねうち「役立ち、つまり交換価値 (exchange-value, la valeur d'échange, der Tauschwert)」との二つがなければならない。商品の使用価値は商品のもっている自然的諸属性によって規定されるのであって、そのような役立ち、つまり商品の有用性を追究するのはむしろ自然科学の領域に属する。経済学が追究すべきものは、商品の交換価値であり、また、商業界および産業界の実務家がひとしく関心をもつのは、もっぱら商品の交換価値である。そこで、古典派経済学は交換価値を分析の対象としてとりあげる。——なぜ、商品は交換価値をもつか、また、その交換価値の大きさはどのようにしてきまるのか？　ここでわれわれは、古典派経済学がいわゆる俗流経済学や今日のブルジョア経済学と比べものにならないすぐれたひとつの観点を守っていることを指摘しておく必要がある。それは、これらの雑多のえせ経済学の俗物的観点とは反対に、古典学派が商品の交換価値がその使用価値によって規定されるものではなく、むしろ両者が矛盾する関係にさえあるものだ、という事実を明確にしているということである。しかしながら、交換価値の分析においては、古典派経済学は、日常用語としての価値の意味を超えることができず、むしろその意味につなぎとめられるという結果になった。というのは、商品の価値は、人間主体にとってのねうちという意味から、それが人間主体にとって値したもの、つまり労苦 (toil and trouble)ということになり、結局、ある商品を生産するために生産者「人間主体が労苦するがゆえに人間主体にとって商品は価値を、交換価値をもつのであり、その交換価値の大きさはその生産に人間主体が費やした労苦、つまり値したところのものの量によってきまる、ということになる。これが古典派経済

学の価値にかんする理論、つまりかれらの労働価値説といわれるものである。マルクスの価値理論と対比するために、『資本論』で用いられている術語をかりて表現するならば、古典派経済学は、商品価値の実体を人間主体にとって要費したものとしての労苦に求めたのである。アダム・スミスがその著『諸国民の富』の第五章「諸商品の実質価格と名目価格について、すなわち、それらの労働価格と貨幣価格について」の冒頭のパラグラフで、「労働はいつさの商品の交換価値の実質的尺度である」と述べ、つづくパラグラフでつぎのように説明しているのは、右のような価値概念を示したものである。

「あらゆるものの実質価格、つまりあらゆるものがそれを獲得しようと欲する人に現実についてやさせるものは、それを獲得するための労苦や煩勞である。それを獲得して売りさばいたり、他のものと交換したりしようと欲する人にとって、あらゆるものが現実にとれほどの値いがあるかといえ、それはこのものがその人自身に節約させる労苦や煩勞であり、またこのものが他の人々に課しうる労苦や煩勞である」(キャン版、第一巻、三二ページ、大内・松川訳、I、一〇五ページ)。

この引用のなかにも示されているように、人間主体にとってのねうちを商品の価値と解する観点に立つときには、商品の交換価値は商品の価値と同じものに、したがってまた商品の価格も商品の価値と同じものにならざるをえないのである。価値の大きさがどのように規定されるかということは、右のような労働価値説によれば、きわめて明瞭であって、要するに、それは、商品を獲得・生産するために人間主体が費やしたところの労苦つまり労働の量によってきまるということである。ただし、この生産における人間主体の労苦の量については、つぎのスミスの言葉が示しているように、スミスなりに解された社会的平均的な質が前提されていなければならない。

「等量の労働は、いつどのようなところでも、労働者にとっては等しい価値である、といってさしつかえなからう。かれの健康、体力および精神が平常の状態で、またかれの熟練と技巧が通常の程度であれば、かれは、自分の安樂、自分の自由および自分の幸福の同一部分をつねに放棄しなければならない。かれが支払う価格は、それとひきかえにかれがうけとる財貨の量がどれほどのものであらうとも、つねに同じであるにちがいない。実際のところ、この価格が購買するこれらの財貨は、あるときはより多量であらうし、またあるときはより少量であらうが、変動するのはそれらの財貨の価値なのであって、それらを購買する労働の価値ではない。いつどのようなところでも、得がたいもの、つまり多くの労働をついやさなければ獲得できないものは高価であり、たやすく得られるもの、つまりきわめて僅少の労働で手にいれられるものは安価である。それゆえ、それ自体の価値がけつして変動しない労働だけが、いつどのようなところでも、それによっていつさいの商品の価値が評価され、また比較されうる、究極の、しかも実質的な標準である。労働はいつさいの商品の実質価格であるが、貨幣はその名目価格であるにすぎない」(前出、三五ページ、訳一〇九ページ)。

ここには、古典派経済学によってとらえられたいわゆる「価値法則」が示されている。それは、商品の価値「交換価値の大きさは、それを生産するために人間主体に平均的に要費したところの労働」・「労苦の量によって決定される」というものである。商品の価値をば交換における商品のねうちであり、また同時にそれは商品が生産主体に費やさせたねうち・「労苦でもあると解する右のような古典学派の価値概念にしたがえば、右の「価値法則」の内容はつぎのように表現することもできる。つまり、それは、商品の交換価値の大きさはつねにその生産に要費した労働量つまり価値量と一致しなければならない、ということである。あとで見られるように、マルクスの確立した科学的経済学にお

ける価値法則について、それは「価値と価格とが一致すること」、「価値通りの価格で売られること」だとする解釈がとりわけわが国の「専門家」「大学教授」のあいだに支配的であるが、それは、これらの「専門家」がミスとまったく同じ価値概念にとらわれていること、マルクスの価値概念とは完全に無縁であることを、このうえもなくよく実証しているものといつてよい。これらの「専門家」が右のようなブルジョアの観点にとられた価値概念にしがみついているかぎり、科学的経済学における価値法則の内容をとらえることがまったくできないばかりか、総じて科学的経済学そのものの内容をも正確に理解することができず、これを歪曲し改ざんする結果におちいらざるをえないのは、理の当然といつてよい。

では、科学的経済学における価値とは、どういう意味のものであるか？ マルクスによつてはじめて確立された価値概念の内容についてはすぐあとでたった究明をすることになっているので、ここではそれにさきだつていわば予備的説明として、価値という言葉のもっとも簡単な、だがもっとも基本的な意味を——さきに述べた二種の解釈と根本的なちがいを端的に示すために——つぎに説明しておくことにしよう。

まず、価値という言葉がねうちを示すものであるという点は、ここでも同じである。だが、問題はそのねうちの意味である。さきの二種の解釈では、それは、人間主体にとつての物のねうちであり、役立ちであった。だがここでは、それは商品そのものが主体としてもつねうちであり、商品が人間に対立するものとして、商品が人間を支配するものとしてもっている社会的なねうち、いかえれば商品そのもののもつ社会的な力である。そして、それは、私的所有という特定の歴史的生産関係のもとで生産された商品だけがもつところの、——あるいは、より厳密にいいあらわすならば——商品だけがもたなければならないところの、社会的なねうち、もしくは社会的な力である。これが、

歴史科学としての科学的経済学における価値の基本的意味であって、これによってはじめて価値概念が経済学のなかでそのもっとも基本的な範疇となっていることが明確になるのである。このような価値の基本的意味をまずはじめにしっかりと把握しておくことはきわめて重要であって、これによって価値概念の基本的内容、たとえば、価値そのものと価値の実体との区別と関連、あるいはまた、価値法則そのものとその貫徹様式との区別と関連というようなきわめて重要な事柄について、正確な理解をうることができるようになるのである。価値の基本的意味を明確にしえない、えせ、「マルクス経済学者」の理論的文章がどのような観念的作文に終るものでしかないかということは、いずれ行論において実例をもつて示されるはずである。⁽²⁾

(2) ここでは、価値という日本語そのものの意味を通常の国語的解釈を超越して説明する「大学教授」の独自の才能を示す文章を二つだけ、あげておこう。

「大学教授」『K先生——「マルクスは労働を価値と言っている。これはまったくの誤りである」」。この「主張」は、マルクス『資本論』のなかにスミス『諸国民の富』の中にある文章を見つけたという、この「大学教授」ならではの超能力を示すものとして不滅の価値をもっている。

「大学教授」『和製デューリング先生——「商品は、種々異なったものとして、それぞれ特定の使用目的に役立つ使用価値としてありながら、すべて一様に金何円という価格を有しているということからも明らかなように、その物的性質と関係なく、質的に一様で単に量的に異なるにすぎないという一面を有している。商品の価値とは、使用価値の異質性に対して、かかる同質性をいうのである」」。商品は一部を除いてすべて——というのは、価値がなくても価格をもつものがあるから——一様に価値をもち価格をもつという点で同質性をもっているが、それだからといって逆に、商品の同質性が価値であるということにはならないなどと考えるのはまだ普通の考え方しかなできない者であって、それでは、この大先生の超論理的思考能力の玄妙性はとうてい感得できない。これについては、後段で吟味しよう。

さて、以上で価値という言葉の基本的な意味をあらまし説明したので、つぎにマルクスのうちたてた科学的経済学

における価値概念について、まずその要点を明らかにすることにしよう。

二

科学的経済学つまりマルクス経済学におけるもっとも基本的な範疇としての価値および価値概念については、わたしはすでにこれまでにくりかえし詳細な論究をこころみてきているので、ここでまた同じ説明をくりかえすことをやめ、この小論の本来の課題である「価値理論の展開」にとってその展開のための最初の出発点または足場を固めるという意味において必要な範囲にかぎって、その要点を摘記するにとどめたいと考える。

(3) 一九四九年に執筆・発表された価値理論にかんする諸論文をはじめとして、それ以来今日までわたくしが著わしてきた多数の論著の大半は、マルクス価値理論の究明に捧げられてきたものといつてよい。とりわけ一九六一年にその(一)を本誌上に発表してから——やむをえない事由で中断があるものの——一九七六年の(十)まで連続発表してきた(いまなお未完の)論文『人間の労働の経済学的考察』は、マルクス価値理論をその重要なすべての広がりと深さにおいて論究することを意図したものである。なお最近においては、同じく本誌上に一九七七年に発表された論文『貨幣の範疇規定について』においてマルクス価値概念の意義、とりわけ価値法則の内容が詳細に説明されている。

1、私的所有という歴史的生産関係のもとで、私的労働によって生産された商品だけが、価値をもつのであり、また価値をもたなければならない。

2、いかなる人間社会も、その成員の労働によってはじめて存続することができるのであり、各成員個人の労働は社会を支える総労働の一分子として社会的労働でなければならず、また、かれの個人的労働が社会的労働であるかぎりにおいて、社会を支える成員としてのかれ個人の労働力の再生産費を社会からうけとることができる。だが、私的所有のもとでの私的生産者の個人的労働は、私的利益のための私的計算にもとづく私的労働であって、そのような私

的労働としてあるかぎり、これをもって社会からなにもうけとることはできない。かれ個人の私的労働は、ぜひとも社会的労働であることを実証しなければならない。では、いかにしてこの社会の成員個人の私的労働は社会的労働であることを実証するか？ いいかえれば、私的労働はいかにして社会的労働に成ることができるか？

私的労働は、生きた労働のままではあくまで私的であって、社会的なものとはなりえない。私的生産者は、かれの個人的労働を生産物に対象化させ、かくして生産物に対象化した労働をもって、社会的労働であることを実証しなければならぬ。

労働の対象化形態をとらえるにあたって、決定的に重要な意義をもつのは、マルクスによつてはじめて明確にされた労働の二面性の厳密な把握である。私的生産者はかれの個人的労働の一面である具体的・有用的労働をもって生産物の使用価値をつくり、他の一面である抽象的・人間的労働を同じく生産物に対象化させて、その商品の価値をつくりださなければならない。つまり、具体的労働を商品の使用価値に、抽象的労働をその価値に、それぞれ対象化・物化させなければならない。そして、このようにして、使用価値と価値とをもつ生産物・商品を社会に出して、他の成員の生産物・商品とつきあわせ、かれの生産物・商品が他の成員の生産物・商品とまったく同じ価値をもつということによつて、これらと等置・交換することができ、しかも、かれの生産物・商品の使用価値がその他の成員にとっての使用価値であることが認められたときに、はじめて、かれの私的労働は社会的労働に成ることができ、社会的労働と認められて、その生産物・商品のもっている価値の大きさに応じて、社会から、他人から、かれ自身の必要とする生産物・商品を私的にうけとることができるのである。

3、私的生産者の労働によつて生産物・商品の使用価値と価値がつくりだされるとはいえ、使用価値と価値は、当

の人間主体。私的生産者とはまったくかわりのない、かれから独立した生産物。商品そのものがもっているものであり、このような物自体のもつ使用価値と価値によって当の人間主体。生産者は完全に左右され、ひきずりまわされる。労働主体は、かれ自身の労働の疎外化形態によって、とりわけ価値によって、徹頭徹尾支配される。というのは、使用価値についてはまだ人間主体にとつてののうち、役立ちという面をもっているが、価値については、そのようなかうなうちには微塵もなく、商品そのものが有する社会的な力として完全に人間を支配するからである。

右の意味において、われわれは、価値と価値の実体との区別と関連を明確に把握しておく必要がある。人間の脳髄、筋肉、神経、感官、手、足などの生産的支出一般としての抽象的・人間的労働は、生産物。商品に対象化し物化してその商品の価値となるが、しかし、人間的労働そのものは価値ではなく、また価値をもつものでもけっしてない。生きた人間的労働は、人間主体がその人間労働力を活動させているあいだけ、活動しているかぎりにおいて存在するが、活動が終われば、もはや人間的労働は存在しない。しかし、人間的労働そのものは対象化。物化して商品の価値を成すものとして存在しつづけるのである。ここで注意しなければならないのは、抽象的・人間的労働の物化または凝固したものが、そのまま価値ではない、ということである。商品は、抽象的・人間的労働の物化または凝固したものゝを体現しているかぎりで、商品価値を、つまり、商品独自ののうち。社会的な力をもつのである。人間的労働は、いかなる社会でも、およそ人間が労働するかぎり存在するのであり、したがって、その物化または凝固もしくは結晶としての労働生産物は、つねに存在しなければならない。だが、人間的労働の凝結もしくは結晶そのものがそのまま労働生産物の価値ではない。人間的労働の物化または凝結として、そのかぎりでは商品は価値をもつ、つまりある大きさの社会的なうち、社会的な力をもつのである。もし、人間的労働の物化もしくは凝結がそのまま価値であ

るとするならば、およそ人間が生産的労働をおこなうかぎり、すべての人間社会に価値が存在することになってしまふ。ここでは、私的所有のもとの私的労働だけが商品の価値を、したがって商品をつくりだすものであるという、科学的経済学のもっとも重要な基本的観点は台なしになってしまふのである。⁽⁴⁾このような、抽象的・人間的労働の物化、いいかえれば価値の実体の凝結もしくは結晶そのものと価値とのちがいと関連を正しく把握することはきわめて重要であつて、とりわけ、これから述べる価値法則の正確な理解にとつては決定的な意義をもっているのである。

(4) 人間の労働がつねに抽象的・人間的労働と具体的・有用的労働との二面をあわせもつもの、つまりこれら二面の統一としてのみ存在するということは、いまだ議論を要しない。そして、私的所有にもとづく私的生産者の社会においてのみ、その一面の抽象的・人間的労働が商品に物化し対象化してその価値を形成するものとなるということも、自明である。ところが、『資本論』第一巻第一章第二節「商品に表わされる労働の二重性」の末尾の文章を誤読して、ここから抽象的・人間的労働は商品生産社会に特有な歴史的範疇であるといった「主張」をひきだしてくる「専門家」さえ現われるにいたっている。たとえば『資本論注解』の著者デ・ローゼンベルグがそれである。かれの「主張」は、例によってわが国の売文的「専門家」のたちまち無断借用するところとなつてゐるが、脳髓、筋肉、神経、感官、手、足などを働かすといふことのない労働、具体的形態だけの「二面的」労働を「発明」したり、これを宣伝してまわるといふところにこそ、この種の「専門家」の真偽が存するのである。

4、マルクス価値概念のなかで、きわめて重要な意義をもっているのは、価値の大きさの規定にかんするものである。価値法則の基本をなしている価値規定についての的確な説明は、いうまでもなく、『資本論』第一巻第一章第一節の後半、「では、その価値の大きさはどのようにして量られるか？」にはじまる叙述部分に見いだされる。マルクスは、この問いにたいして、「それに含まれている『価値を形成する実体』の量、すなわち労働の量によつてである」(前出、五三ページ)という答えを出しているが、すぐさまこの答えそのものについて重大な限定を加えている。それは、つづくパラグラフの冒頭にかかげられたつぎの文章から展開される。

「一商品の価値がその生産中に支出される労働の量によって規定されているとすれば、ある人が怠惰または不熟練であればあるほど、かれはその商品を完成するのにそれだけ多くの時間を必要とするので、かれの商品はそれだけ価値が大きい、というように思われるかもしれない」(前出、五三ページ)。

マルクスは、この当然の疑問を提起するだけでこれにすぐさま答えることをせず、「しかし、諸価値の実体をなしている労働は、同じ人間的労働であり、同じ人間労働力の支出である」(前出、五三ページ)という文章において、問題は価値を形成する人間的労働の質、そのものにあることを的確に指摘し、「同じ人間労働力」という質的規定の内容を「社会的平均労働力という性格をもつこと」——「社会的平均労働力として作用すること」——「一商品の生産において平均的に必要な、または社会的に必要な労働時間だけを必要とするもの」⁽⁵⁾というように展開して把握し、さてそこで、この最後の「社会的に必要な労働時間」なるものについて、それは「現存の社会的に標準的な生産諸条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度とをもって、なんらかの使用価値を生産するために必要な労働時間」にほかならない、ということを示しているのである。

(5) この「平均的に必要な、または社会的に必要な労働時間」というたったひとつの文句にしがみついて、これは価値を形成する労働の量的規定を示したものと早やのみこみをし、つぎのようにこれを解釈している「専門家」や「大学教授」は掃いて捨てるほどいる。たとえば、同一の商品を生産するのにAは3労働時間、Bは4労働時間、Cは5労働時間、Dは6労働時間を必要とするならば、その商品の価値は3、4、5、6を平均した労働時間、つまり4・5労働時間である、というのである。この連中にはマルクスがことさら「怠惰または不熟練」として、人間的労働の質的差異を強調している文字がその眼に入らないのである。右の例でいうならば、Aはxという質をもった労働力の支出で3時間をかけてその商品を生産したのであるから、かれの生産物・商品に対象化している労働量はたんなる3時間ではなく、まさしく3x時間でないといけないのである。

り、同様にしてBの生産物「商品のふくむ労働時間は y 時間であり、Cのは z 時間、Dのは w 時間となるのである。こうした場合、これら四つのそれぞれ異なった質の労働時間について、つまり、 $3x$ 、 $4y$ 、 $5z$ 、 $6w$ という数値について、それらの平均値をどのようにして算出することができるというのであろうか？ 右の「専門家」や「大学教授」の計算によれば、

$$\frac{3x + 4y + 5z + 6w}{4} = 4.5$$

となるのだそうである。なんとたいした「専門家」、「大学教授」であろうか！ これらの「専門家」、「大学教授」のなかには、右の「計算」だけではあきたらず、さらにこれに輪をかけて、「工業では平均原理、農業では限界原理」などといった、ひたすら調子のよい語呂合せを唱えて、マルクス経済理論からの抜粋をちりばめたりつばな著述をものしている先生もあらわれているのである。右の語呂合せについては、またさきについてお目にかかることにしよう。

さきにみたように、スミスは商品の価値「交換価値がその生産に人間が費やした労苦によって、つまりその生産に要した平均的労働の量できまるとしたのであって、これが古典派経済学におけるいわゆる価値法則の内容である。そこでこの価値法則論との対比においてマルクスの価値の大きさの規定にかんする主張をとらえるならば、マルクス経済理論における価値法則とは、商品の価値の大きさがその生産に要した社会的平均的質の人間の労働の量によって、いいかえればさきに示されたような意味における「社会的必要労働時間」によって決定される、ということであるといえよう。マルクスによつてはじめて解明された価値法則の基本的内容については、一再ならずこれまで拙論のなかで詳細な論究がおこなわれているので、ここでは紙数の制限もあるため同じ説明をくりかえすことをひかえ、マルクスの確立した価値法則にかんする理論のうちで当面もつとも緊要と考えられるいくつかの論点をとりだして、これに簡単な説明を付けくわえることにしよう。

(6) それらのうちでもっとも詳しい説明がおこなわれているのは、拙論『人間の労働の経済学的考察(七)』の中の価値法則にかんする部分である(本誌第二十九巻第一号、六〇—七八ページ参照)。

イ 科学的経済理論における価値法則について、第一に銘記されるべき眼目は、それが価値を形成する人間的労働の質を規定したものである、ということである。それぞれ質を異にする無数の私的・個人的な労働は、社会的・平均的質の労働に還元されて——そしてまたそれに還元されるかぎりにおいて——社会的労働として妥当しうるものとなり、その対象化として商品の価値を形成することができるのであり、またそうして価値を形成することによって社会的労働に成らなければならない。

ロ 人間的労働の質を示すものとしては、労働の強度と熟練との二つがあり、強度は人間労働力を支出するさいの強さ。密度を示し、熟練は等しい密度の労働を等量に支出しながらそれがどれだけの量の生産物に対象化するかというその効率または作用度を示す。労働の熟練は当の労働者自身にとっての負担つまり支出する労働量にはかわりはないが、しかし、それが対象化する生産物の総量を規定し、したがって単位生産物にふくまれる商品価値の大きさを規定する。さきにあげた「社会的に標準的な生産諸条件」も、労働者・生産主体の外部にあってかれの人間的労働の対象化する生産物総量を規定する要因となり、したがって単位生産物にふくまれる商品価値量を規定するものとして決定的な意義をもつのである。

ハ 私的・個人的労働が社会的・平均的な質の人間的労働に還元されてはじめて社会的労働としてある量の商品価値を形成するものになるということは、社会的・平均的な質の人間的労働がすでに存在して生産者たちに知られているとか、あるいはまた——表現を変えれば——ある商品の生産に社会的に必要な労働時間がどれだけであるかということがとらえられるとかいうことを意味するものではけっしてない。まさに反対である。私的生産者すべてがさまざまな質の人間的労働のさまざまな量の対象化したさまざまな種類の商品を市場に出して、かれらの商品を比較しさま

さまざまな比率において等置しあい交換しあうことを通じて、つまり市場における商品全体の競争を通じて、すべての生産者の知らないところで、かれらのとうてい知りえない形で、社会的・平均的な質への還元がおこなわれ、またそれによって規定された量の価値をもつものとして妥当するものとなる、いいかえれば価値法則が貫徹することになるのである。それゆえ、私的・個人的労働の社会的・平均的質の労働への還元とそれによる商品価値量の確定は、すでに労働が終わって商品に対象化したのちに、市場における諸商品の等置「交換」、したがってそれらの競争を通しておこなわれるのであって、このことはまた、あらかじめ生産過程において労働の質をできるだけ高め生産諸条件をできるだけ改善「向上」させることを私的生産者に強制するものであることを意味する。それと同時に、この価値法則は、社会的・平均的な質以下の人間労働力および社会的・標準的以下の生産諸条件をもつてする私的生産者の再生産を脅かし困難にするものとなり、反対にこれら両者が平均的水準以上の者にたいしては富の蓄積を保証するものとなる。価値法則は、私的生産者の不断の分解をおしすすめるかくれた槓杆となるのである。

二 では、価値法則は私的生産者によってまったく感知されえないものであり、最後まで社会の表面に現われることなく、いわば影の法則としてのみ存在するものであるかといえ、それはけっしてそうではない。本質はつねに現象するのであり、それ自身と異なった現象形態をとるかぎりで、本質である。法則は現実にある特定の具体的な現象形態を採って貫徹するのであり、またそのようにして貫徹するかぎりで、法則なのである。商品が価値法則に規定されてある大きさの価値をもつことつまり価値法則そのものは、けっして把握することはできないが、ある大きさの価値をもつことは直接・絶対的ではなく間接・相対的に、つまりその商品の交換におけるうち「交換価値として示されるし、また示されなければならない。つまり、交換価値は本質である価値の必然的な現象形態であり、価値法則はこ

の交換価値の不断の運動において、かつまたその運動を通じて、貫徹するのであり、またそのようにして貫徹しなければならぬのである。

われわれは、ここにおいて、本質または法則がその必然的な現象形態とちがつているものであるということを、改めて銘記する必要があると考える。交換価値はつねに価値から離れて変動するがゆえに、本質「価値の現象形態」であり、また、価値はつねにそれ自身とちがつた交換価値として現われるがゆえに、現象形態「交換価値にたいして本質であるのである。社会的必要労働時間による価値量の規定という価値法則は、社会の表面で交換価値の不断の變動という現象形態をとって、かつまたそのような現象形態を通じて、貫徹するのである。

では、交換価値の不断の變動は、どのようにして価値法則の貫徹を現わすものとなるのか？ 社会的必要労働時間によって商品価値が規定されるということ、いいかえれば社会的に標準的な生産諸条件と労働の強度および熟練の社会的平均度をもって生産した商品だけが商品生産者自身の再生産を保証するに十分な社会的な価値をもつし、またそうした価値をもつものでなければならぬということは、まず第一に、それぞれ異なった種類の生産物を生産する各生産諸部門のあいだに社会的に均衡のとれた労働の配分がおこなわれるように交換価値が變動することによって、つらぬかれる。より詳しくいうならば、社会的必要を超えて過剰に労働が投下され生産物量が必要以上に生産されたところではその商品の交換価値が社会的必要労働時間によって規定された商品価値を下廻りそのために商品生産者の正常な再生産を困難にすることによって投下労働量を減少させるようにし、また社会的必要をみたしえない過小の生産物しか生産しないところではその商品の交換価値は社会的必要労働時間によって規定された商品価値を上廻って騰貴し、そのために商品生産者は投下労働量を越える交換価値を実現することができるためこの部門への投下労働量を増

大させることになり、かくしてさきの部門では交換価値は下落し、あとの部門では交換価値は上昇し、それぞれ商品価値を中心として、かつそれに向つての変動をくりかえすことによつて、平均的に、また事後的に、均衡のとれた労働の配分を実現させ、社会的必要労働時間によつて規定された商品価値が現実につらぬかれることになる。だが、ここに述べられたのは、交換価値の変動を通じて価値法則がつらぬかれるための一つの側面をとらえたものにすぎず、さらにいま一つの側面をあわせ考慮する必要がある。それは、異なつた生産諸部門のあいだにおける労働の配分にかかわるものではなく、同一の部門のなかでの生産者の競争にかかわるものである。ここでは「社会的に標準的な生産諸条件と労働の熟練および強度の社会的平均度」をもたない、それ以下の生産諸条件と人間的労働をもつて生産する生産者の商品は、さきに述べた異部門間の競争によつて平均的に実現される均衡のとれた労働配分のもとの交換価値での交換＝販売のおこなわれるかぎり、当の生産者自身が投下した労働量を回収することは不可能であり、かれ個人の生活および生産を維持すること、つまり再生産は困難におちいる。それゆえ、かれ自身を生産者として維持＝再生産するためには、生産諸条件を社会的に標準的なものもしくはそれ以上に改善し、労働の熟練および強度もできるだけ高めて社会的平均度以上のものにしなければならない。このようにして、同じ生産部門のなかでの生産者の競争を通じて社会的必要労働時間によつて規定される価値が交換価値の変動の中心を成すものとして平均的につらぬかれ、さらにまた、異なつた部門の間での生産者の競争を通じて形成される均衡のとれた労働配分を中心とする交換価値の変動によつて、価値法則が、つまり、社会的必要労働時間によつて価値量が規定されるという法則が、現実につらぬかれるのである。

以上、マルクスの価値概念について、主として、そのうちの価値規定および価値法則をとりあげて、それらがどの

ような意味内容をもっているか、いいかえればこの二つの言葉がもつ意味の広がりや深さなどがどのようなものであるかということのあらましを簡単にみてきたのであるが、これらの説明は、まだそれらの全体をつくしたものではありません、いわばそれらの基本的なもの、もっとも基底的なものをあきらかにしたにすぎない。したがって、われわれとしては、以上の基本を基礎に据えてさらにそれらの展開を正確にあとづけていく必要がある。科学的な経済理論の体系のなかでそれらがもっている真実の意義は、それによつてはじめて明確にとらえられるのであり、その意味をこめてこの小論の主題も「展開」としてただしく設定されているのである。

ただ、これまで科学的経済学における価値概念の基本について述べてきたところを要約しておく意味もかねて、つぎに二つのことを付けくわえて説明しておくことが、このさい必要でもあり適切でもあると考えられるので、これについて述べておくことにしよう。それは、ひとつは、価値概念、価値規定および価値法則という三つの言葉について、それらのおよその意味を、いいかえればこれら三つの言葉の区別と関連を簡単に説明しておくということ、そして、いまひとつは、価値法則の意義を疑う余地なく闡明しているマルクスの叙述をひとつあげて、そのおよその内容を明らかにすると同時に、これについての曲解ないしは歪曲を一掃しておくことである（前者は簡単なのでこの節でひきつづき説明されるが、後者はいささか複雑なので、節を改めて説明することにしよう）。

まず、価値規定とは、私的所有のもとで社会を支えている個人的・私的労働について、その抽象的・人間的労働が社会的使用価値をもつその生産物・商品に対象化してその商品そのものの価値になり、その抽象的・人間的労働のある一定量がその商品の価値の大きさを規定し、かくして私的生産者の私的・個人的労働がはじめて社会的労働として妥当するものになることができ、またそのようなものとして妥当しなければならない、ということの意味するもので

ある。

価値法則は、まず、右の価値規定のうちの価値の大きさの規定に関するものであるが、それのみにとどまるものではない。正確にいうならば、価値法則とは、私的所有のもので私的・個人的労働が社会的・平均的労働力の支出という意味での社会的・平均的労働に還元されて労働生産物・商品に対象化し商品そのものの価値となることによって始めて社会的労働として妥当しうるし、また妥当しなければならないということを基本として、商品の価値量が社会的必要労働時間によって決定され、またこのようにして規定された一定量の商品価値がその商品の交換価値の不断の変動を通じて現実に貫徹する、ということの意味するものである。ここでとりわけ肝要なことは、社会的・平均労働への還元ということと、価値の必然的現象形態としての交換価値の不断の変動における貫徹ということである。

右の二つにたいして、価値概念という言葉はもっとも広い内容をもつものといえる。それは、もちろん、価値規定も価値法則もそのうちにふくんでいるが、さらにそのほかに、およそ価値と結びつき、これと本質的関連をもつすべての事柄がふくまれることができる。たとえば、資本も価値概念と本質的関連をもち、この関連の正確な把握なしには、資本の理解はきわめて不十分なものとならざるをえない。しかし、この小論では、本来価値理論の展開を目ざすものであるから、その展開において本質的関連をもつものとして出てくるものは、ここでは一応考察の外におくことができる。したがって、価値概念という言葉のいわば基本的な、狭い、厳密な意味内容としては、およそつぎのようなものがその不可欠の構成要素として挙げられるであろう。

イ、基本的生産関係としての私的所有のもとの私的・個人的労働。

ロ、価値規定。

ハ、価値法則。

ニ、価値の必然的な現象形態としての価値形態、したがってまたその完成形態としての貨幣形態。

ホ、商品の物神的性格。

右のうち、ニとホはそれぞれ独立の節として『資本論』第一巻第一章のなかで詳細な説明が与えられており、それぞれにまとまった独自の内容を持ち、しかも、価値理論の展開にとって直接重要な意義をもっているものとは考えられないので、この小論ではこれら二つについて特別に論ずることはひかえ、必要あるさいに論及するにとどめることにしたいと考える。⁽⁷⁾

(7) 念のためここに強調しておく必要があるのは、価値概念が現実に妥当するのは、私的所有にもとづく私的労働によって支えられる商品生産社会だけだ、ということである。このことは、マルクス・エンゲルスによってくりかえし明確に教示されているところであり、マルクスによってうちたてられた科学的経済理論のもっとも重要な基本を成すものである。ところが、今日「社会主義国」と称される諸国の自称「マルクス経済学者」の大半は、社会主義社会に「商品、価値、価値法則」が存在し、おまけに「利潤」までりっぱにあると書き立てている。この小論の「一」でかかげた科学的用語にかんするエンゲルスの説明などものともせず、科学的経済学における形態規定という概念を理解する手数はいっさい省略して、マルクス・エンゲルスの明確な教示など眼中になく、超俗物的観念をもつてつくりあげられた、科学的経済学のはるか上を往く真正正銘の超マルクス主義理論が「權威」をもって罷り通るとは、なんとありがたい「社会主義国」であらうか！

三

マルクスの価値法則にかんする的確な叙述が見出されるのは、かれの友人、ルートヴィヒ・クーゲルマンあての有名な手紙（一八六八年七月十一日付）の中である。つぎに、関連する箇所を——紙幅の都合も考慮して一部省略して——引用してかかげよう。

『ツェントラールブラット』のほう「マルクス『資本論』第一巻にたいする匿名の書評—山本」はどうかと言いますと、この男にできる最大限の譲歩とは、およそ価値なるものを想定するならば、わたくしの結論を認めざるをえない、と認めることなのです。かわいそうにこの男には、もしわたくしの本に「価値」にかんする章が一章もないとしても、わたくしがやってみせた現実の諸関係の分析が、現実の価値諸関係の証明と実証を含むことになるという点がわからないのです。価値概念を証明する必要がある、などというおしゃべりができるのは、問題とされている事柄についても、また科学の方法についても、これ以上はないほど完全に無知だからにほかなりません。どんな国民でも、一年はおろか、二、三週間でも労働を停止しようものなら、くたばってしまうことは、どんな子供でも知っています。どんな子供でも知っているといえ、つぎのことにしてもそうです。すなわち、それぞれの欲望の量に応じる生産物の量には、社会的総労働のそれぞれ一定の量が必要だ、ということなのです。社会的労働をこのように一定の割合に配分することの必要性は、社会的生産の規定された形態によってなくなるものではなく、ただその現象の仕方を変えうるだけだということも、自明のところなのです。自然諸法則は一般に揚棄されえないものです。歴史的に異なった状態のなかで変わりうるものは、それらの法則が貫徹される形態だけです。そして社会的労働の連関が個々人の労働生産物の私的交換として自らを妥当させている社会状態においてこの労働の一定の割合での配分が貫徹される形態こそが、これらの生産物の交換価値にはかからないのです。

価値法則がいかに貫徹されるかということを展開することにこそ、科学が存するのです。だから、最初からこの法則に矛盾するように見える諸現象を「説明し」ようとすれば、科学以前の科学を持ち出さなければならぬことになるでしょう。リカードウの誤りはまさに、かれが価値について論じている第一章で、まず最初に展開しなければなら

ないありとあらゆる範疇を与えられたものとして、前提し、それによってこれらの範疇が価値法則に適合したものであることを証明しようとしたことにあるのです。

.....

俗流経済学者は、現実の、日々の交換価値と価値量とが直接に同一ではありえないということには、ほんのこれっぽっちも気がつかないのです。ブルジョア社会の機知は、まさに、先験的に生産の意識的な規制がまったくおこなわれないという点に在るのです。理性的なものや自然必然的なものは、盲目的に作用する平均としてしか貫徹されないのです。そこで、俗物は、内的連関の暴露にたいして、現象面における事態はちがつてみえると言い張って、大発見でもしたように思いこむのです。実際には、かれらは仮象を固執してそれを究極のものだと言い張っているのと同じことです。それでは、結局なんのために科学はあるのでしょうか？

しかし、ここでは問題はもうひとつの背景をもっています。連関への洞察とともに、実際の崩壊に先きだって、現存の事態が永遠の必然性をもっているという理論的信仰はことごとく崩壊します。だから、ここでは、無思想の混乱をいつまでも残しておくことが、支配階級の絶対の利益なのです。そして、学問上の奥の手といえば、経済学では総じて思考してはならないのだ、という言い草しか知らないような、中傷をこととするおしゃべり屋に金が払われているのは、それ以外になんのためでしょうか？」（マルクス『エンゲルス全集、第三三卷、五五二―五五四ページ、傍点―マルクス）。

みられるように、マルクスはまず、「価値概念を証明する必要がある」などといって、『資本論』にけちをつける俗物にたいして、『資本論』のなかで、——とりわけ、その第一章で——おこなわれている現実の諸関係の分析その

ものがすでに現実の価値諸関係の証明と実証をふくんでいるのであって、このことがまったく読みとれず、そこに「価値」にかんする章がないと言って非難するのは、当の論者自身が通常の思考能力すらもたないことを表白するものだ、ということを確認にしている。こうした俗物は、価値概念そのものについてばかりでなく、総じて科学の方法についても完全に無知であることをさらけだしているのである。ここに述べられていることは、今から一世紀前に『リテラーリッシュ・ツェントラールブラット・フュール・ドイッチュラント』（ライプツィヒ）におこがましくも『資本論』第一巻にたいする書評を発表した匿名の俗物に向けられたものであるといえ、それから一世紀たった今日のわが国で俗流経済学者たちのあいだで隠然たる勢力を張りつづけている和製デューリング先生の同じく『資本論』第一巻第一章にたいする超論理的で斬新な批判にたいしても、右のマルクスの言葉はまさにぴったりのものである。この和製デューリング先生は、「マルクスは価値の実体について論証をしていない」との断をくだし、「価値の実体の論証は、ほかならぬ資本の労働生産過程についてなされるべきである」とさかんに論じているが、まぎれもない超俗流的観点を示す表題——「経済原論」——をそのままいただいた主著の中の「資本の労働生産過程」などという珍妙な「過程」をとりあつかったくだりにおいては、「価値の実体の論証」を発見するためには見えない文字を判読するという超能力が必要なのである。元祖デューリングはマルクスを非難攻撃してマルクスの名声を蹴落とそうとしてあわれ失敗したものであるが、和製デューリング先生は、元祖そのものの超論理を駆使して簡単にマルクスを超克しながら、しかもマルクスの名声はその手に確保し、「マルクス経済学」という商標はけっして手放さないで、ひたすらにこの商標のあらたかな御利益^{ゴリヤ}を手に入れようとつとめたのであって、この点から見ると、後者のほうがはるかに実利にさとい超俗物的「教授」であつたといわなければならないのである。

つぎに、マルクスは、「労働」と「労働の配分」について、それがどんな人間社会にとっても必要不可欠であり、ただ人間社会の歴史的形態によってちがうのは、この社会的自然法則が貫徹される形態だけ、それが現象する仕方だけである、と述べている。この「労働」とは、社会を支えるために各成員個人が必要労働をしなければならないこと、つまり、社会的労働の必要を示したものであり、「社会的労働の配分」とは、いうまでもなく、社会的必要を充たすために各生産部門に適当な割合で社会的総労働が配分されなければならないということである。では、私的所有にもとづく商品生産社会では、右のような社会的必要を充たすための「一定の割合での労働の配分」は、なにによっておこなわれるか、その社会的自然法則はどういう現象をとって貫徹されるかといえば、それはまさしく生産物・商品の交換価値であり、厳密にいうならば交換価値の不斷の変動によってである。このことは、マルクスによってそれは「まさにこれらの生産物の交換価値である」と明確に述べられているところによっても、疑う余地なく明白である。ところが、大多数の「マルクス経済学者」と称する「専門家」や「大学教授」は、右のマルクスの文字がその眼に入らず、ひたすらに、「社会的労働を一定の割合に配分する」ことが価値法則であり、また、この「均衡的配分」をおこなうものが価値法則である、という「主張」をあきもせずくりかえしているのである。マルクスは、右の「社会的労働の一定の割合での配分」は超歴史的な社会的自然法則だと明示し、この自然法則の貫徹される形態、いいかえればこの自然法則がそれによってつらぬかれる現象形態は、交換価値だと明記している。ここには、価値法則という言葉はまったく出てこない。では、なぜこれらの「専門家」や「大学教授」は、右の自然法則を貫徹させるものが価値法則だと強弁するのか？ しかも、たいていは、このクーゲルマンあての手紙を「典拠」だとしながら。その理由は簡単である。それは、マルクスの手紙のうちの右の交換価値を指摘した個所につづいて、——ただし、行を改め

て——示されているところの、「価値法則がいかに貫徹されるか」ということを展開することにこそ、科学が存する」という文章である。残念ながら、「仮象にしがみついて、それを究極のものだと言い張っている」俗流経済学者たちにくらべてみるならば、「マルクス経済学者」と自称するこれらの「専門家」や「大学教授」たちは、仮象にしがみつくどころか、ありもしない「価値法則」という言葉をマルクスの文章の中にむりやりおしこむことをあえてしているという点で、まさに俗流経済学者など足許におよばないほどの厚かましいマルクス改ざんをやつてのけているのである。右の手紙の叙述のなかで、最大の眼目をなしていると思われるべきは、まさにこの「価値法則がいかに貫徹されるか」ということを展開することにこそ、科学は存する」という文章である。われわれは、この文章のもつ意味内容をその十分な広がりと深さにおいて正確にとらえることが肝要である。

まず、われわれは、科学についてマルクスとエンゲルスがくりかえし述べている金言をしかと銘記しておかなければならない。それは、「もし、本質と現象が一致するならば、およそ科学は不要である」という金言である。さきの手紙の中にも明示されてあるように、われわれの目の前にある「現実の、日々の交換価値」は現象であつて、これは誰にでもつかみうるものである。だが、それは現象にすぎず、その奥に、表象をもつてはとらえられない本質があることは、表象にとらわれた俗物には逆立ちしてもわからない。だから、ブルジョア経済学、正確には俗流経済学は、交換価値、いかえれば価格を究極的なものと考え、もっぱら価格のみに執着してあれこれの量的変動とその組合せを術学的に論ずることに終始している。本質・価値の欠如した価格のみの「経済学」こそは実利的ブルジョアにまさにうつつけのもののなのである。これにたいして、科学としてのマルクス経済学は、現象・交換価値を分析してその奥に本質・価値があることをつきとめ、さらにこの本質・価値が必然的に交換価値という現象形態をとつて現

われることを説明する。しかも、この現象形態「交換価値はつねに本質」価値から離れ、それをそのまま現わすことはない。まさに、「現実の、日々の交換価値」は、本質である「価値量」とは「直接に同一ではありえない」のである。「社会的必要労働時間によって規定された一定量の価値」は、それから乖離する日々の交換価値の不断の変動においてのみ、またその不断の変動を通じてのみ、現象しうるし、また現象しなければならない。このことについては、すでにこの小論の「二」のなかで詳しい説明がおこなわれているので、ここに改めてくりかえす必要はない。いずれにしても、「社会的労働を均衡的に配分する法則」をもって価値法則だとする「主張」は、超歴史的な社会的自然法則を価値法則ととり違えるものであり、右の社会的自然法則の貫徹する形態「様式である交換価値そのものを価値法則ととりちがえるものであり、交換価値と価値および価値法則との内部的な必然的関連についての完全な無知を示したものであつて、これを要するに、マルクス経済理論のもっとも重要な基本をなす価値概念そのものについての完全無欠な曲解を、つまるところマルクス経済理論全体の歪曲と改ざんを示したものにほかならない。科学のなんたるかをわきまえないこうしたまぎれもない俗物的曲論を粉碎するところにこそ、右の手紙の眼目があつたにもかかわらず、そうなのである。

われわれとしては、右のような俗物的修正論議にこれ以上かかわることはやめて、さきの手紙の中の科学についての文章のうちに、さらにたちいった検討を要するきわめて重要な意義をもつ指摘が見出されるので、これについてぜひとも論及しておかなければならない。それは、「価値法則がいかに貫徹されるかということを展開する」という言葉であり、とりわけそのうちの「展開する (entwickeln)」という言葉である。

「展開する」とは、この場合、もっとも簡単な、もっとも抽象的な、したがってまたもっとも基本的な本質をまず

明確に把握し、ここから出発して、しだいにただしく規定を加えていき、より具体的でより複雑なその現象形態を追求して、最後にもっとも具体的でもっとも複雑なその現象形態まで、その必然的な発展を理論的に正しくあとづけること、である。これを当面の問題にあてはめてみるならば、「一商品の価値は、その生産に必要な社会的・平均的質の人間の労働の分量によって、いいかえれば、社会的必要労働時間によって規定される」という価値法則は、文字どおり、表象をもつてはとらえることのできない法則であり、本質である。マルクスは、まず、「現実の、日々の交換価値」という現象を分析してその奥にかくされている本質としての価値および価値法則を明確にし、つぎに、この本質である価値および価値法則が必然的に現象する形態を、つまり価値の必然的な現象形態としての交換価値と、価値法則の必然的な現象形態または貫徹様式としての交換価値の運動とを、明らかにしている。ところで、さきに「二」で説明されたように、交換価値の騰落の運動により社会的労働の均衡的配分の社会的自然法則が貫徹され、その交換価値の騰落は平均的にみた場合、「社会的必要労働時間によって規定された一定量の価値」に一致する、つまり、変動する交換価値を通じて価値法則が現実につらぬかれることになるのである。ところで、『資本論』第一巻第一章第一節の価値の大きさの規定にかんするマルクスの叙述に示されているように、各個別的労働力が社会的平均労働力として価値を形成するためには、「社会的平均労働力として作用する」こと、つまり「一商品の生産においてただ平均的に必要な、または社会的に必要な労働時間だけを必要とする」ものであることを要する。これを裏返しに言うならば、もし一商品の生産に要する社会的必要労働時間が五労働時間であるとすれば、ある個別的生産者がそれに要した労働時間がたとえ七時間であろうとまたは四時間であろうと、すべて、社会的・平均的質の労働で五労働時間というのがこれら個別的生産者の生産した商品の価値となる。つまり、それと同じ種類の商品は、一つ残らず一様に社会的

必要労働五時間の価値をもつのであり、これによってこの商品を生産した個別的生産者はすべて社会的・平均的質の人間の労働を五時間費やしたものと認められる。そのために投下された各個人の人間の労働の質的差異や労働時間の大小は、こうしてすべて社会的平均労働五時間に還元されてしまうのである。こうしたもつとも簡単でもつとも基本的な形態で価値法則が貫徹されるのは、いいかえれば、無数の個別的生産者によって生産されるあらゆる種類の商品について、それぞれ一種類に属する同種商品がいずれも同じ一個の価値量をもつものでなければならぬのは、したがって、各同種商品はまったく同一の価値量をもつ商品として市場に出され、そこでまったく同じその現象形態「交換価値をもつものとして交換されなければならないのは、商品生産のまだ比較的未発達段階、つまり、私的所有者が労働力の担い手自身である独立生産者によって商品が生産される段階である。だが、商品生産は必然的に発展をとげ、早やかれおそれ、資本主義的商品生産に移行するのであって、この段階においては、価値法則の貫徹する形態は、右のような簡単な交換価値およびその運動から、よりいっそう複雑なものとなり、その現象形態はいよいよますますその本質から離れ、多くの規定をもったより複雑でより具体的なものとならざるをえない。簡単にいえば、価値法則が貫徹される形態は、商品生産の資本主義的商品生産への移行⁽⁸⁾発展にともなつてしだいに発展をとげるのである、商品生産の発展に対応するこの貫徹様式の発展を論理的に正しく整理してとらえ、解明することこそが、まさしく「展開する」ことにほかならないのである。

さて、これまでの論究によって、科学的経済学における価値概念、とりわけ価値法則の基本的意義はほぼ明らかにされたと考えられるので、以上の論究をいわば基礎として、さらにそのうえに、「価値法則がいかに貫徹されるか」ということを展開する⁽⁹⁾「ことをこころみることにしよう。

(8) 本稿では、「価値と価格との一致」をもって価値法則の貫徹と称し、それら両者の「不一致」をもって価値法則の阻害または修正と解する超マルクスの「理論」をとりあげなかったが、それについては、いずれ後段でふれることにしよう。

(未完)

(一九八〇・四・三)